Second Tree（仮題）

水音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅｃｏｎｄ　Ｔｒｅｅ（仮題）

【Ｎコード】
Ｎ１５８６ＢＡ

【作者名】
水音

【あらすじ】
ある年の三月、アメリカ西海岸で連続殺人事件と連続爆破事件が発生した。
殺害された中にはアメリカ有数の大企業のＣＡＯまでいたが、大量の捜査人員を投入しながらも犯人は捕まえることができなかった。
ただひとつ、捜査関係者の手元には二つの目撃情報しか残らなかった。

ひとつは事件の前後に際して、必ずと言っていいほど現場には子どもを連れた黒髪の東洋人女性がいたこと。
そしてもうひとつは、大企業のＣＡＯが殺害された際には赤黒い巨大な光が
目撃されていたことだけだった。

００１（前書き）

これはＳＨＵＦＦＬＥ！の二次小説である『開花日和』の補足的ストーリーです。
しかも稟たちは出てきませんので、三次小説とでもいえばよろしいのでしょうか。作者の知能ではわかりませんが。

『開花日和』の時間軸より未来のお話ですが、主人公の名前は伏せておきます。が、原作含め『開花日和』を知っている方にはすぐバレると思います。

彼女の目的や経緯など、謎を多く含ませつつも、突如として騒動に巻き込まれた彼女の行く末をご覧いただけたらと思います。

001

三月、アメリカ西海岸北部。
ワシントン州シアトル郊外にあるとあるファミレス――。

何でこんなことになっているんだっけ。オーダーがすべて届いたところで、彼女は近くにあった店員が置いていったバインダーに五十ドル紙幣を挟んで裏返し、頭を抱える。
目の前、赤の他人のお金で美味しそうにお子様ランチやサンデーなぞを頬張る幼い姉弟の手前、悪態のかわりに溜め息を吐き出した彼女は慣れないブラックコーヒーを一口喉奥に流し込むと記憶を辿ることにした。

＊　＊　＊

「それじゃ、お土産は何がいい？」
「何でもいいよ白蓮。あんたが無事に戻ってくるなら」
去りし先月末、空港の出入り口で彼女はキャリーケースと小さなバッグで日本の実家に帰るルームメイトの少女を見送った。どうやら「家」のほうで何か揉め事があったらしく、彼女もそれは詳しく踏みこまなかった。このルームメイトのこと、赤の他人である自分にも教えられる範囲でなら後々教えてくれるだろうと読んだからだ。
「嬉しいねえ。あたしと離れるのがそんなに嫌かぁ？」
「前言撤回。京都のマツタケと気仙沼のフカヒレを一キロずつ。あんたは帰ってこなくてもいいから空輸で送ってきて」
「それ酷くね？　てか、あんたはあたしを破産させる気かっ！？」
すっかり西洋文化に染まっちゃって。大げさなほど喜びを体現し

て抱き締めてくるルームメイトにそんなことを思いながら、白蓮の胸の中から脱出した彼女の冷たい一言に白蓮はびしっと彼女を指差してツッコミを入れた。

ここアメリカで彼女が初めて知り合ったのは通うことになっていた学校の同級生ではなく、すっかり容赦ないボケもツッコミもできる間柄になった目の前にいる少女・夕月白蓮（ゆうづきびゃくれん）だったのだが、白蓮の打ち解けやすい性格に助けられ、既に彼女もアメリカで多くの知人・友人ができていた。とはいえ、白蓮が既に二十歳を超えているせいか、彼女が日本在住時代には今まで行く機会のなかったクラブやバーでの紹介が多かったのは、心を許していない相手には急に消極的になる「元々の自分」を心配してくれたゆえのことだと彼女は自身をごまかしている。

「ほら。もうすぐ搭乗手続き始まるから行ってらっしゃい」

「ちっ、わあったよ」

１５８ｃｍの彼女より頭一つ大きい白蓮はそう言うと、キャリーケースとバッグを手に取る。

「あとな、あたしの車使うのはいいけど、絶対に壊すなよ？」

「はいはい。いいから早く実家に帰りなさい」

白蓮から左手に渡された車の鍵を握り締め、彼女は空港内に消える白蓮に向けて厄介者を追い払うように右手を振る。出会った頃とベッドの上は可愛げがあったのに。そんな白蓮の悪態は空港の出入り口の雑踏に消えてしまい、彼女もその悪態が日本語だったのは何かの聞き間違いだと気にしないことにした。

渡米して毎日のように見てきた白蓮の後ろ姿が雑踏に見えなくなったところで、さて、と一息を吐いた彼女も踵を返す。駐車場に停めてあった白のレクサスＬＸの右側ドアを開けようとした手をひっこめ、小さく自嘲した彼女は改めて前方左側に回り、運転席に乗り込んだ。そしてエンジンをかけながら後部座席に待機していたノートパソコンで新着メールの確認を済ませた彼女は、自宅のあるアパートへ向かって車を走らせた。

多少強引ながらもアクティブな白蓮の手で何度も外に連れ出され、すっかりシアトルの細道まで覚えてしまった彼女が中心部にほど近いアパートの前まで来ると、年配の女性がこちらに向けて手を振っていた。
「何かあったんですか？」
「ああ。あんたさぁ、子どもなんていないよねえ？」
空き巣か水道管の破裂か国家組織の家探しでもあったのかと思った彼女が助手席側のパワーウインドウを開け、管理人であるその女性に尋ねると、いきなり突飛な質問が飛んできた。
「…はい？　子ども？」
産んでもいないのにいるわけがない。むしろ年齢的には私もまだ子どもだ。彼女はそう思いながら尋ね返す。残念ながら彼女が経験しているのはロストバージンまでで、バージンロードの歩行も母国に残る幼なじみの少年とお嫁さんごっこのレベルであるくらいだった。
「じゃああんたのルームメイトのほうかな？」
「白蓮ですか？　いえ、あの娘も出産まではしてないはずですけど」
決して彼女も白蓮のすべてを知っているわけではないが、あのざっくばらんな性格上、子供を産んだことがあるならばその類の話も遠慮なく自分に話しているはずだった。
しかし、
「あっ！　ママだぁ」
「お帰りなさい。ママ」
「じゃあこの娘たちは、いったい誰の娘なんだろうねえ？」
彼女の目の前にはなぜか自分に向けて「母親（ママ）」を連呼する二人の幼い姉弟と、皮肉めいた嫌疑の視線を送り続ける管理人が立っていた。
「ちょっと待ってください管理人さん。私は未婚ですよ？」

「今じゃ片親の子も珍しくないだろう？」
「いえいえ、ですから私は子どもなんて産んでませんって」
「そんなに認知したくないのかい？　あたしがこの姉弟から聞いた話だとママの外見があんたそっくりだったんだけど。頭の両側で結んだ長い黒髪に緑の瞳だって」
「ええっ？」
　車を降り、管理人の女性からの嫌疑を晴らそうとする彼女だったが、すっかり女性の中では「姉弟のママ＝彼女」の図式が成立してしまっていた。しかもいつの間に姉弟から聴取したのか、その外見まで自分そっくりだと言われてしまってはただただ驚くしかなかった彼女は初対面の姉弟を睨んだが、
「ママぁ～。僕お腹空いたぁ」
「私も」
　既に彼女は初対面の、しかも好きな人とも離れ離れの未婚女性を捕まえてママ呼ばわりする失礼な姉弟に懐かれてしまっていた。
「とにかく、ちゃんと面倒見るんだよ」
「え？　あ、いえ、だから私の子じゃな――」
「それじゃあね」
　誰しも面倒事、とかく家族関係や恋人関係に関わりたくない気持ちはわかる。だが、実際にその渦中に中心人物として招かれてしまった彼女の言い分を遮るようにして管理人の女性はドアを強く閉めてアパートの中に引っ込んでしまった。
「あ……ぁ」
　管理人を呼び止めようとしたが失敗し、虚空を彷徨っていた右腕から力が抜け、立つ瀬が突如奪われてしまった彼女は肩を大きく落として首を垂らした。
　まるで奈落に落ちていくような感覚の中、黒地に白い水玉模様の彼女のワンピースの裾を姉である少女が、そしてその下に履いていたスキニーを少年が掴んでいた。

００１（後書き）

さて、まだタイトルも決定していないのに始まりました。

制作進行中のネタ３本のうちの先陣を切って公開します。
タイトルや章題などは決まり次第改編しますので、ご理解のほど、よろしくお願いします。

内容的に、何してるんだとお怒りになられる方もいるかもしれませんが、作者の趣味丸出しでいきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1586ba/

Second Tree（仮題）

2012年1月4日00時52分発行